

5 ^{かずちょうにしせいせきしゅつどひん} 一町西遺跡出土品 57点 [有形文化財（考古資料）]
 （板絵4点、人形木製品15点、斎串状木製品4点、札状木製品1点、土器33点）

[出土地] 橿原市一町

[所有者] 奈良県（橿原考古学研究所保管）

[時代] 平安時代（11世紀前葉～12世紀初頭）

[概要]

一町西遺跡は、京奈和自動車道建設に伴う発掘調査によって発見された弥生時代から中世に至る複合遺跡である。特にその第3・4次調査では、8世紀中葉から12世紀初頭まで連綿と累積する遺構と遺物が確認され、土地利用の変遷が明らかとなっている。主な遺構は、流路および溝であるが、その西側には井戸や土坑が検出され、多量の遺物が出土していることから、調査区の西側に近接して集落が存在したと考えられている。

古代の遺構のうち、11世紀前葉から12世紀初頭の南北溝SD25から、板絵や人形木製品等からなる祭祀関連木製品が出土している。板絵は、長さ33.1～33.8cm、幅10.7～11.3cm、厚み0.15～0.25cmで、ヒノキの板目材の木表側の面に5種（馬、牛、牛または羊、犬、鶏）の動物が墨で描かれる。馬には鞍や引き綱、牛には頸木と綱、犬には首輪が表現されている。人形木製品は、完形のものでは長さ43.8cm、幅5.3cmの大型品と長さ25.5cm、幅4.5cmの小型品があり、厚みは0.2～0.5cmで、ヒノキを主としながらも一部にコウヤマキが用いられる。顔を墨で描くものが多く、頭部が残っている12点のうち9点に顔が描かれ、1点には顔のほか、背面に符籙が書かれている。

10世紀後半の日記である『親信卿記』には、祓に用いる御贖物として人形代と馬、牛、犬、鶏の形代があるとされる。板絵に描かれた動物のうち3番目を牛とすれば、この動物形代の種と一致する。また、人形代とみられる人形木製品がともに出土していることも、組み合わせとしては合致しており、板絵および人形木製品あわせて、祓に用いられた祭祀遺物である可能性が考えられる。

奈良・平安時代には、土馬や人形、人面墨書土器など、祓に用いられた祭祀遺物が数多くあり、板に単独の馬が描かれた絵馬の出土事例も少なくない。しかしながら、一町西遺跡出土品のように、複数の種類の動物が描かれた板絵の類例はほかに知られていないほか、人形木製品もともに出土していること、また、ともに出土した土器が11世紀前葉から12世紀初頭に比定され、その年代を明確にできることから、これらは律令期から中世への過渡期の祭祀遺物の実態を示す資料として極めて貴重なものである。



【写真】動物の描かれた板絵